

瀬戸内と山陰を工藝でつなぐプロジェクト

越え
え
る
工
藝

Project of Connect SETOUCHI and SAN'IN with KOGEI
KOGEI Exhibition "Cross Over"



2019.3.22 (金) - 3.24 (日) 11:00 - 17:00 (最終日は16:00まで)

会場 | 楠戸家住宅 Art Space はしまや & ギャラリーはしまや 入場無料

Date | Thu 22 - Sun 24 March 2019 11am - 5pm, Venue | Art Space Hashimaya & Gallery Hashimaya, Admission free

主催 | 瀬戸内と山陰を工藝でつなぐプロジェクト実行委員会 共催 | 鳥取大学地域価値創造研究教育機構
後援 | 公益財団法人福武教育文化振興財団 公益信託とりぎん青い鳥基金 山陽新聞社 新見市 倉敷市教育委員会 鳥取県 beyond 2020
協力 | NPO法人倉敷町家トラスト 池本喜巳小さな写真美術館

本展覧会は、公益財団法人福武教育文化振興財団文化活動助成および公益信託とりぎん青い鳥基金の助成事業として実施するものです。

瀬戸内と山陰を工藝でつなぐプロジェクト

越える工藝

中国山地の山並は一見穏やかなようで、南北に位置する瀬戸内と山陰の気候や文化を隔てる険しい壁としてそびえ立ちます。からりと明るい瀬戸内と、気候が厳しい山陰では、人の気質や風景もがらりと異なります。一方で共通するのは海と山に囲まれた豊かな自然。森林資源、地下資源に恵まれた土地には古くからの作りが根付き、かつては藩をまたぎ技術の交換も行われていました。

本展では、中国地方を拠点に創作をする磁器、陶器、木地、漆器の工芸作家四人の活動をご紹介します。これらの工藝は、いわば自然を切り取り人が使う道具に仕立てる技術です。繊細な季節の変化を肌で感じ、土の、炎の、木の、漆の小さな声を聞きながら対話する。そうして出来上がる作品は、作家が身を置く土地の空気を自然とまとっているようです。

四人の作家はそれぞれ四十歳前後という年齢にさしかかり、今その手に握られているのは時代を越え受け継がれてきた伝統の技術です。師匠から教えを受け、十数年にわたる研鑽を経、思い描いたかたちを表現できる技を身につけてきました。一方で先人が積み上げてきた伝統の中で、個としての輝きを放つことは容易ではありません。時代の変化も壁となります。かつては天然の素材を使うことは、人の営みと直結していました。森が手入れされなければ、木材や漆が入手しづらく、環境の問題にも目を向けざるを得ません。また、くらしの変遷が人ともとの関係性を変え、工藝をとりまく流通にも変化が生まれています。現実的な苦難と向き合い、作家としてのありかた、生き方を模索することも作品作りの一環といえます。

どの時代でも作り手は様々な壁を越えなければなりません。

もの作りの喜びと苦悩が同居する、若手工芸作家の創作の過程をご覧ください。

出品作家

藤本 かおり (工房このか) | 木地師 Fujimoto Kaori - wood turner

森 和之 | 陶芸家 Mori Kazuyuki - ceramist

前坂 成哲 | 漆芸家 Maesaka Nariaki - lacquerware artist

山本 佳靖 (国造焼) | 陶芸家 Yamamoto Yoshiyasu - ceramist

ギャラリーを巡るまち歩き

「鳥取の工芸作家と巡る～倉敷ギャラリーさんぽ」

日時 | 2019年3月21日(木祝) 13:30-15:30 (13:00受付開始)

集合 | Art Space はしまや

参加費 | 入館料・飲み物代実費 2,400円程度 (民藝協会員は入館料無料)

定員 | 7名 (事前予約先着順、Facebook イベントページにて申し込み受付)

本展出品作家 森和之、山本佳靖とともに、大原美術館工芸館、倉敷民藝館を巡ります。最後は日本郷土玩具館「のくら」でお茶を飲みながら、ゆったりとしたひとときを楽しんでいただきます。

まち歩きの案内役は、倉敷の歴史と散歩に詳しい鳥取大学の成清仁士准教授がつとめます。

出品作家 ギャラリートーク

「越える工藝と私たち」

日時 | 2019年3月23日(土) 13:30-14:30

集合 | Art Space はしまや

参加費 | 無料 お申し込み不要 どなたでもご参加頂けます

本展出品作家が本展や作品についてご紹介します。

お問合せ

瀬戸内と山陰を工藝でつなぐプロジェクト実行委員会 代表 成清 仁士

鳥取大学地域価値創造研究教育機構 地域連携PBL推進室長 / 准教授

〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南 4-101

TEL 0857-31-5999 MAIL narikiyo@tottori-u.ac.jp

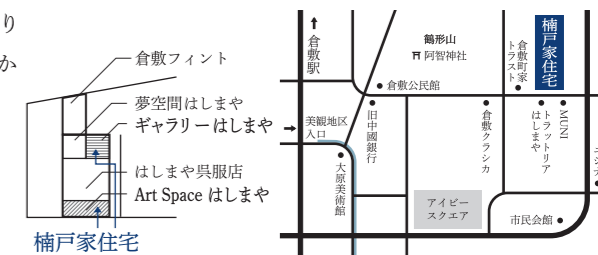
デザイン 写真 会場構成 | 川崎 富美



越え
え
る
工
藝

Project of Connect
SETOUCHI and SAN'IN with KOGEI
KOGEI Exhibition
"Cross Over"

In SETOUCHI and SAN'IN, diverse cultures have been cultivated by historical exchange related to industry and trade. They both reflect the different natural features and richness of the cultural climate. This exhibition focuses on the works of the four craftsmen based in SETOUCHI and SAN'IN. The exhibits are porcelain, pottery, woodturning, and lacquer. Four craftsmen are about 40 years old, and they inherit traditional techniques from their masters. Please pay special attention to their creative works carrying on the Japanese tradition.



楠戸家住宅



会場 | 楠戸家住宅

Art Space はしまや & ギャラリーはしまや
岡山県倉敷市東町 1-20

楠戸家住宅 倉敷市指定重要文化財(主屋1棟)
Photo: R.HATA 国指定登録有形文化財(主屋ほか5棟)

「はしまや」の屋号を持つ楠戸家は、明治2年創業の呉服店。現在の店構えは明治中期に整えられたとされ、明治時代中期を代表する町家として、倉敷の町家の歴史を現代に伝えています。昭和30~40年代には司馬遼太郎、バーナード・リーチ、W.グロピウスなど、国内外の著名人が訪れた場所でもあります。呉服店の営業を続けながら蔵をカフェやギャラリーに改装して新たな価値を創造しており、倉敷における古民家再生の代表例でもあります。

Venue | Art Space Hashimaya, Gallery Hashimaya
Higashimichi 1-20 Kurashiki Okayama

Kusudo House
Kurashiki City Designated Important Cultural Property,
National Registered Tangible Cultural Property

"Hashimaya" Kusudo house is a historic Kimono store founded in 1879. It is a Machiya which is representative of the Meiji era in Kurashiki. In the Showa 30-40's, Shiba Ryotaro, Bernard Leach, W.Gropius and others visited. It is also a representative example of old traditional house revitalization in Kurashiki, such as refurbishing a traditional warehouse "Kura" to a cafe and gallery.



道具/弟子入りしてすぐに師匠と河原で拾った石は、20年使っている。刃物は自分で鍛冶仕事をして作る。

木地師

藤本 かおり (工房このか)

1974年鳥取県鳥取市生まれ。鳥取市在住。大学で建築を、その後飛騨高山の職業訓練校で木工を学ぶ。2002年鳥取県八頭郡若桜町の木地師・山根肅氏のもとで木工轆轤を師事。また、漆芸を兵庫県山崎町の伝統京蒔絵師・武野恭永氏に学ぶ。2007年鳥取市河原町本鹿に「工房このか」設立。木地から仕上げの塗りまでを一貫して行っている。

Fujimoto Kaori - wood turner

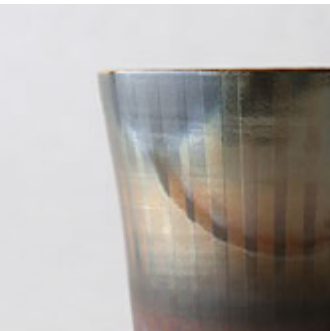
Born in 1974. Living in Tottori City. She studied architecture at university and then studied woodworking at Hida Takayama. Since 2002 she studied under Yamane Tadashi, a Tottori prefecture traditional craftsman of wood turner. In addition, she studied lacquer art under Takeno Kyoei, a traditional Kyoto Makie painter. Established "Kobo Conoka" in 2007. She has been doing consistently everything from shaping to coating with lacquer.



鳥取市河原町、小高い場所から谷を見渡せる眺めのよい工房。内外に丸太から荒削りの器まで様々な工程の木材が積み上げられています。木地師、藤本が素材とするのは、河原町をはじめ、中国山地の森から切り出された広葉樹などです。何年も乾燥させたのち、製材し、木取りして荒削りを数回、その都度数ヶ月放置して水分を少しずつ抜いていきます。急ぐと割れて、それまでの工程と素材が水の泡になるのです。回転する木材に力を込めて刃を当てながら、木と会話し、木がなりたい形を探ります。節や虫食いもその木が生きてきた証だから、と作品の個性として活かします。

大学で建築を学んだ藤本は、自らの手で作りたいという思いから飛騨高山で家具作りに携わります。その後一点を見つめて制作できる挽物（木工ろくろで加工された木器）作りに惹かれ、鳥取の木地師山根肅に弟子入りしました。近代以前の木地師は、山々を渡り歩き手頃な木を倒して削り出し、ろくろで挽いた木地を漆の塗師に託すことが生業でした。かつては分業であった職業も現在の山陰では成り立たず、木地師自ら仕上げまでできる必要があります。藤本は師匠の勧めで漆塗や蒔絵を学び、現代の木地師のあり方を模索しています。

国産木材の流通が縮小するにつれ、材料の入手が難しくなります。森は手入れされなくなるとバランスを崩していきます。今制作に使っている木は昔の人が次の世代のために植えてきたものだから、現代の我々にも次世代へ残していく責任があります。使う木は鳥取の山が健康を維持できるように選びたい、そう語る藤本。木に、森に、師匠に、先人たちに、言葉の端々に敬意と感謝がこもっています。



道具/手に伝わってくる感覚を頼りに制作すると安心できる。使う道具は減ってきた。作品よりさらに大きなさや作りに苦勞する。

陶芸家

山本 佳靖 (国造焼)

1981年鳥取県倉吉市生まれ。倉吉市在住。2001年父・浩彩に師事。2013年第56回日本伝統工芸中国支部入選(以降4回)。第22回日本陶芸展入選(以降1回)。2017年第34回田部美術館大賞「茶の湯の造形展」奨励賞受賞。鳥取県美術展覧会無鑑査。

Yamamoto Yoshiyasu - ceramist

Born in 1981. Live in Kurayoshi City. Since 2001 he studied under his father, Yamamoto Kosai, a Tottori prefecture designated intangible cultural property of Ceramics. 2013 selected for the Japan Traditional Kogei Chugoku Branch Exhibition (After that, twice) Selected for the Japan Ceramic Art Exhibition (After that, once) 2017 Tanabe Museum of Art "Exhibition of tea ceremony", Incentive Award Tottori prefecture art exhibition, exemption of examination

国造焼の4代目である山本。古くは伯耆国の中心であったという鳥取県倉吉市不入岡は、良質な陶土が採れたことから、明治時代には生活民具や土管が焼かれる窯場でした。民具や土管が新しい素材にとって代われ、需要がなくなると、国造焼は焼締（釉薬を用いず高温で焼成する備前焼などにみられる製造法）による制作を始めます。映画好きの山本は、脚本家を目指しながら家業を手伝ううち、陶器制作の魅力に引き込まれていきます。



工房で最初に目に飛び込んできたのは巨大なさや（焼成の際に陶器を入れる素焼の容器）。山本にとって「焼成は装飾」だと言います。作品と共にさやに取まった木炭などの素材が燃え、色を出し模様を描きます。さやの中で起こる化学変化を想像しながら日々新たなアイデアの検証を重ねています。家業として受け継いできた技術を基礎として、自分らしい表現の模索は続きます。

一方で成形は黙々と形を整える作業。ろくろを回しながら外形をつくり、数日かけて凹凸を均し、最後には筋ひとつない滑らかな肌合いとなります。差し引きのできない完成された形状には緊張感が漂います。よいものを作るには心穏やかに日々を送ることが大事だと語る山本。もの静かさの中に挑戦的な一面を隠し持ち、真摯に土と炎と向き合っています。

陶芸家

森 和之

1979年鳥取県出身。鳥取市在住。2004年大阪芸術大学工芸学科陶芸コース卒業。2006年前田昭博氏(人間国宝/白磁)に師事。2011年鳥取市青谷町にて独立。2016年日本工芸会正会員。2015年日本伝統工芸中国支部展鳥取県知事賞。2018年日本伝統工芸中国支部展日本工芸会賞。

Mori Kazuyuki - ceramist

Born in 1979. Live in Tottori City. In 2004 graduated from ceramic course, crafts department, Osaka university of arts. Since 2006 he studied under Maeta Akihiro, a living national treasure of white porcelain. Independent in 2011. 2016 Full member, Japan Kogei Association 2015 Japan Traditional Kogei Chugoku Branch Exhibition, Tottori Prefectural Governor Award 2018 Japan Traditional Kogei Chugoku Branch Exhibition, Japan Kogei Association Award



磁器は作り手の仕事を昇華させる素材、と森は言います。鳥取市青谷町一和紙の産地でもある美しい谷に構えられた工房。塵ひとつなく整えられているのは、磁器制作において鉄粉などの小さなゴミが致命傷となるためです。狂いなくひとつひとつの工程を踏んでいく森の制作風景に、思わず息を飲みます。

磁器の土は粘りがなく、ろくろで引き延ばす過程で傷が入りやすいため細心の注意が払われます。内外から圧迫し、生地を締めつつ慎重に、思い描いた形に近づけていきます。磁器の造形は削りで最終的な形に仕上げられるため、ろくろでひいた時点ではまだ工程の半ばです。計算された下書きの線に沿って彫刻された、ほんの数ミリの段差が釉薬の濃淡を生み出します。焼きあがると形と線が、色のグラデーションを介し一体となります。透き通るような青白磁と、澄んだ闇のような瑠璃釉。艶を抑えたふたつの青は、実直さと情熱を併せ持つ森の人柄を表わしているかのようです。



道具/木製のだんご(へら)は学生時代から手作りしているもの。使い込んで滑らかなになってきた。

漆芸家

前坂 成哲

1980年広島県廿日市市生まれ。岡山県新見市在住。2002年香川県漆芸研究所に入所。2005年岡山県指定重要無形文化財保持者・山口松太氏に師事。2009年日本伝統工芸中国支部展岡山県教育委員会教育長賞受賞。2011年日本伝統工芸中国支部展岡山放送賞受賞。2016年日本伝統工芸中国支部展山陽放送賞受賞。(2019年3月広島県へ転居予定)

Maesaka Nariaki - lacquerware artist

Born in 1980. Living in Niimi City. In 2002 entered the Kagawa Urushi lacquer Ware Institute. Since 2005 he studied under Yamaguchi Matsuta, important intangible cultural property of Okayama prefecture (lacquer art). 2009 Japan Traditional Kogei Chugoku Branch Exhibition, Okayama prefectural board of education committee education chief Award 2011 Japan Traditional Kogei Chugoku Branch Exhibition, OHK Award 2016 Japan Traditional Kogei Chugoku Branch Exhibition, RSK Award

「自然を捻じ曲げずに心を込めて展開する。」前坂が作品と向き合う姿勢を語ります。

中国山地の中腹に位置する岡山県新見市の山間部で、漆器の制作に勤しむ前坂。自然の風景の一コマを切り取ったような図柄は華美でなく、前坂の目が素材な光景を実直に写し取っていることがわかります。様々な加飾の技法が伝承されている漆器の装飾。彫ることで下に施した色漆が現れる彫漆、彫った溝に色漆を入れ研ぎ出す蒔罫や、金粉を施す時絵、螺鈿（貝殻）のような異素材を埋め込む象嵌など。身近な草花や生き物を詳細に観察してスケッチし、絵柄やパターンとしてデザインし、表現に適した技法を選択します。繊細に施された細工がしっとりした黒い漆器の肌に浮かび上がります。

漆器本体の成形も、先人が生み出した多様な製法があります。中でも「乾漆」は型を作り、麻の布を貼り重ねた後型を抜き、研ぎ出して形を整える技法です。手作業で作られたものとは思えないほど精巧で、人の手の技の極致を見た思いがします。本体から作れば数年がかりになるという作品制作は、根気と愛情を要する仕事です。

前坂は高松で漆芸を学び、岡山の漆芸家山口松太の元で修行した後、地域おこし協力隊として新見へ移住しました。備中漆の産地である新見で、漆畑の手入れや漆掻き（漆の樹液の採取）、漆の精製などに携わり、素材と深く向き合ってきました。漆の木は樹液を一定量採取すると役目を終えます。国産漆の生産が減少している今、採取だけで終わらず増やしていくことも重要な課題です。漆にまつわる文化や歴史、技術価値が世間に知られなければ新たな後継者も生まれません。漆の魅力を伝え、素材を守っていくことも使命と感じ、日々作品作りに邁進しています。

道具/漆塗りの刷毛は人の髪の毛を使う。結婚式の翌日に妻が切った髪で作った。この刷毛で仕上げるると自ずと心がこもる。

